



辻田白菜(上) 紅大根(下)



長崎赤かぶ

長崎の 伝統野菜を 継承する

中尾順光さん

もう一度、会いたい



長崎伝統野菜育成保存会の会長を務める中尾さん

九年前、長崎の伝統野菜の灯が消えることを心配していた中尾順光さんのその後を訪ねた。

二〇二五年秋、中尾さんの姿は長崎市内の小さな畑にあった。二十代から四十代の若い世代が中心となり、長崎で景観まちづくり活動を行う市民団体「長崎都市・景観研究所」。彼らは斜面地にある空き地を農園として活用しようと、「さかのうえん」を運営し、長崎白菜（唐人菜）、辻田白菜、長崎たかな、長崎赤かぶ、紅大根といった長崎の伝統野菜を栽培している。

代表を務める平山広孝さんは、伝統野菜の栽培は難しく、最初はいまよく出来なかったと話す。「でも、中尾さんに丁寧に教えていただき、だんだん上手になってきました（笑）。長崎の伝統野菜は主に中国から伝わったものです。この辺りは、かつては唐人屋敷の後方に広がっていた畑でした。江戸時代はきつと、ここで伝統野菜が作られていたのではないかと思います。斜面地の活用だけでなく、歴史をつないでいくという点でも、この場所で伝統野菜を栽培する意義はあると考えています」。

平山さんは、伝統野菜を知ってもらうための活動もしているという。「長崎の雑煮といえば、唐人菜ですが、昨年の大晦日には、商店街の飲食店と協力して、唐人菜の入った雑煮を提供しました。また最近では、福祉の事業所とコラボして、伝統野菜を乾燥し、お土産として販売することも始めました」。中尾さんは、若者たちの情報発信力に驚くとともに、彼らとの出会いをきっかけに、人と人がつながり、伝統野菜の種が広まっていくのを実感していた。「『伝統野菜

平山さんは「伝統野菜への強い想いや食の大切さを中尾さんに教えていただきました」と話す。

の作り方を教えてほしい」と若い方が訪ねて来られることもあり、本当に嬉しく思っています」。平山さんは「八十歳を超えてもなお活動を続けている姿に私たちも刺激をもらっています」と話し、これからも仲間を増やしていきたいと夢を語ってくれた。若者たちと一緒にいる中尾さんは、本当に楽しそうだ。「私は彼らのまちづくりへの思いにも強く共感しています。空き家や空き地問題をこうしたアイデアで解決に導き、地域の人たちにも喜ばれるなんて、素晴らしいですね」。

斜面地を活用した住宅街の畑。長崎の伝統野菜は意外な形で受け継がれていた。



長崎市中新区には「さかのうえん」として活用している空き地が5ヶ所ある。彼らは、坂のまち・長崎を満喫しながら畑仕事を楽しんでいる。

